

ごあいさつ

学習院大学史料館では平成17年に山階宮家の史料を管理されている京都勸修寺より、1000枚以上にのぼるガラス乾板、写真の寄託を受けました。これらの写真のほとんどは山階宮家の方々が自ら撮影されたものです。写真は趣味であると同時に、山階宮家の記録を残す側面もありました。

これらは当時の宮家の様子を鮮やかに甦らせる貴重な写真であることはもちろんのこと、当時の風景風俗の記録としても大変史料価値の高い写真群です。

当館ではこの貴重な写真群を公開すべく、昨年『写真集 近代皇族の記憶—山階宮家三代—』（吉川弘文館）として刊行いたしました。

今回の展覧会では、この写真集の原版となったガラス乾板、オリジナルプリントを初めて公開すると共に、この7月に財団法人山階鳥類研究所よりご寄託いただいた史料の一部も展示いたします。

この展覧会を通じて明治～昭和初期の宮家の記憶をご紹介できれば幸いです。

また、この展覧会の開催にあたりまして、多大なご協力とご教示を賜りました勸修寺の筑波常遍住職、財団法人山階鳥類研究所に厚くお礼申し上げます。

平成21年10月

学習院大学史料館

山階宮家写真群

二代菊麿王は写真に深く興味をもたれ、写真機がまだ広く一般に普及する以前の、明治30年代の早い時期から写真を撮影されていた。今回展示している写真の中にも菊麿王自ら撮影された「菊麿王殿下御撮影」と添書きされているガラス乾板が多数ある。菊麿王は、休日には王子、王女たちをお連れになり、都内や別邸において写真撮影をされた。父宮の手ほどきを受けた王子、王女たちは、幼い頃より写真に親しまれていた。そして、34歳という若さで菊麿王が急逝された後も、写真という趣味は父宮の思い出とともに王子たちに受け継がれた。

武彦王は、「空の宮様」として知られているが、一方「ヤマシナ映画部」を創設され、飛行機操縦の様子を16ミリ無声映画フィルムで撮影なさるなど、映像の分野でも活躍された。しかし大正12年(1923)9月1日の関東大震災で山階宮鎌倉御別邸が罹災し、第一子懐妊中の佐紀子妃が建物崩壊により圧死される。この悲劇の最期に直面されたのち、王の精神状態は徐々に悪化、昭和期に入ると各地の別邸内でひっそりと過ごされるようになる。そのような生活の中でも、常に手元に置かれていたのが、このガラス乾板と写真焼付であった。

一方、芳麿王は鳥類研究の目的もあり、写真撮影を大変熱心になさり、自ら撮影されたフィルムは20,000枚に及んだという。

武彦王・芳麿王それぞれがお持ちであった写真は、平成17年・同21年に当館で収蔵する運びとなった。分散して保管されていた2つの写真群は90年の時を経て、邂逅したのである。



平成21年度 学習院大学史料館 常設展
近代皇族の記憶—写真が語る山階宮家三代の暮らし—

【主催】学習院大学史料館
【協力】勸修寺・財団法人山階鳥類研究所
【会場】学習院大学史料館展示室(北2号館1階)
【会期】平成21年10月1日(木)～11月30日(月)
【開室時間】平日12:00～17:00(土曜日10:00～12:00)
日曜・祝日・大学休講日(10/16・17・30・31・11/2)は閉室
【担当】長佐古美奈子
※敬称等は省略させていただきました。

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1 ☎03-3986-0221内線6569
<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>

近代皇族の 記憶

平成21年度 学習院大学史料館 常設展

10月1日(木)……11月30日(月)

写真

が語る
山階宮家三代
の暮らし



I 山階宮家の はじまり

初代 晃親王

晃親王は文化13年(1816)9月2日に伏見宮邦家親王第一王子として誕生。落飾後勤修寺を相続し、済範と称した。

しかし天保12年(1841)、無断出奔し嚴重蟄居となる。蟄居中晃親王は仏教だけではなく、日本や世界の情勢等に関し書籍を通じて勉学に励んだ。当時、ペリーの浦賀来航・日米和親条約の締結など、社会情勢の変革のなか、安政5年(1858)5月蟄居を解かれた。その後親王の元には勤王の志士たちの出入りが激しくなっていた。親王は朝廷内の意識改革の必要性を痛感した島津久光、松平春嶽ら公武合体派諸侯の工作によって元治元年(1864)還俗し、山階宮の宮号を賜った。宮号は、勤修寺のある山科の地名にちなんだものである。この後、晃親王は、孝明天皇の猶子として親王宣下、国事御用掛となり、朝議や国事評議に列席し、また識者より西洋事情や兵法等の意見徴収を行った。佐久間象山は、たびたび親王に呼ばれ、元治元年7月11日にも訪れたが、宮とは会えず、その帰途に、刺客に襲われて客死した。

慶応3年(1867)明治天皇が踐祚。晃親王は大政奉還や王政復古の評議に列席。朝廷に総裁・議定・参与の三職が新設されると、親王は議定として外国事務総督に任じられた。

明治6年(1873)明治天皇の命により、皇族が軍人になることを義務付けられた中、晃親王は高齢のために免除された。その後隠居帰洛を希望し、京都転居が認められた後は、伝統文化の維持復興に努めた。同31年2月、81歳で薨去。

二代 菊麿王とその王妃

山階宮二代菊麿王は、明治6年(1873)7月3日晃親王の第一王子として京都に生まれた。はじめ梨本宮守脩親王の養嗣子となり、同14年梨本宮家を継承。翌15年学習院に入学。同18年築地海軍兵学校予科に進学。同年山階宮に復帰し、晃親王の後嗣となる。この頃から皇太子明宮嘉仁親王(大正天皇)と親しい間柄となった。同22年、天皇より留学の命をうけ、渡独し、同24年ドイツ海軍兵学校に入学、同27年に帰国した。

日清戦争では、威海衛沖海戦・台湾澎湖島占領に出撃した。明治29年には軍艦「武蔵」に搭乗し、北海道・千島列島を巡航し、日本最北端の占守島に上陸もしている。日露戦争では巡洋艦「八雲」で旅順口海戦に参戦。多趣味で多方面にて活躍していた最中、同41年4月28日急性肺炎のため薨去。34歳の若さであった。

菊麿王は明治28年9月公爵九条道孝次女範子と結婚。範子妃は孝明天皇女御英照皇太后の姪で、大正天皇后節子(貞明皇后)の実姉にあたる。範子妃は聡明、快活な性格で、バイオリンやダンスなどを趣味とし、英語は津田梅子に師事していた。菊麿王と結婚後、武彦王、芳麿王、安子女王を出産するが、同34年11月11日に薨去。22歳の若さであった。

菊麿王はその後公爵島津忠義三女常子と再婚。昭和天皇皇后良子(香淳皇后)は常子妃の姪にあたる。第三王子藤麿王、第四王子萩麿王、第五王子茂麿王を出産。菊麿王が急逝ののちは、幼くして山階宮家当主となった武彦王を助け、王子王女の養育に努めた。昭和13年(1938)2月26日薨去。享年63。



山階宮家初代 晃親王



山階宮家二代 菊麿王



山階宮家三代 武彦王

II 宮家の 学問

山階宮家の方々は皆、
学問に情熱を燃やした。



気象学・菊麿王

菊麿王はドイツ留学中に気象学に強い関心を持ち、高層気象観測の必要性を提唱し、富士山山頂への気象観測所建設を目指した。富士山頂で最初の越冬観測を行なった気象学者野中到を支援するとともに、明治34年(1901)筑波山に気象観測所を建設。気象台(現気象庁)職員の佐藤順一を観測所主任に任命し、同35年1月1日から観測を開始。その後、佐藤は冬期富士登頂に成功する。この間のいきさつについては新田次郎の小説『凍傷』に詳しい。

航空学・武彦王

武彦王は、明治31年(1898)2月13日に菊麿王第一王子として誕生した。同41年学習院初等学科4年在学中、父菊麿王薨去により、山階宮家当主となった。同44年学習院中等学科に進学。皇族のための別荘(現学習院大学東別館)に入寮し、学友とともに学生生活を送った。大正4年(1915)海軍兵学校予科入学、卒業後当時入隊希望者の少なかった海軍航空隊に入隊。同14年には立川に御国航空練習所を創設し、「空の宮様」として知られた。昭和22年(1947)10月皇籍離脱、山階宮三代はここに終わる。

鳥類学・芳麿王

芳麿王は明治33年(1900)7月5日に菊麿王第二王子として誕生。大正9年(1920)に臣籍降下し山階芳麿侯爵となった。陸軍士官学校在学中の同14年4月2日、伯爵酒井忠道二女寿賀子と結婚。幼少時から鳥に強い関心を持ち、昭和4年(1929)に東京帝国大学理学部動物学科に入学。後に理学博士号を取得。同7年には「山階家鳥類標本館」を東京府豊多摩郡渋谷町上渋谷(現東京都渋谷区南平台)の自邸に開所。同17年財団法人山階鳥類研究所を創設し、理事長として日本鳥類研究の第一線で活躍した。

歴史学・藤麿王

藤麿王は明治38年(1905)2月25日菊麿王第三王子として誕生。大正13年(1924)東京帝国大学文学部国史学科入学。昭和3年(1928)に臣籍降下し、筑波藤麿侯爵となり、子爵毛利高範五女喜代子と結婚。卒業後は大学院へ進学。指導教授であった黒板勝美博士の助言で、同4年東京代々木の自宅に筑波家国史研究部を創立。当時の日本にはなかった各年度の国史学文献リストと紹介批評(『史学雑誌』『回顧と展望』の前身)を掲載した年鑑『国史学界』を発行した。同21年より靖国神社宮司となった。

III 写真が語る 宮家の暮らし

この写真群の特徴は「宮家の方々がご自身で撮影し、宮家の生活を写し出したもの」ということである。例えば、洗濯物が風に吹かれる裏庭や、働く人々がちょっとピンボケで撮影されている風景—それがこの写真群の計り知れない価値なのである。

写真機やガラス乾板、フィルムが大変高価な時代、日常の風景などを撮る、それが宮家の方々の「趣味」であり、また「記録」にこだわった山階宮家の方々の「思い」でもあった。

ここからみえてきたのは宮家のゆたかな暮らしである。そこには写真を撮影し、活動(映画)を見、鳥を飼い、宮邸の職員たちやその家族と四季折々の行事を愉しみむ……という心豊かな生活があった。私たちが想像しているより、戦前の宮家の生活ははるかに自由であったのかもしれない。……そのような思いを抱かせる写真群である。

